

初回実習が介護学生の認知症の人のイメージに与える影響：認知症対応型生活介護実習前後のアンケート調査をとおして

著者	菊池 小百合
雑誌名	佐久大学信州短期大学部紀要
巻	28
ページ	16-20
発行年	2016-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1050/00000202/



研究ノート

初回実習が介護学生の認知症の人のイメージに与える影響 —認知症対応型生活介護実習前後のアンケート調査をとおして—

菊池小百合 (佐久大学信州短期大学部)

The influence with dementia image after the first practical training in caregiving
—through the questionnaire with before and after of the first daily long-term care of a
dementia patient practical training—

Sayuri Kikuchi (Department of Shinshu Junior College at Saku University)

Keywords: Image of dementia, care worker student, Questionnaire survey

I. はじめに

介護福祉士養成教育カリキュラムは、“その人らしい生活”を支えるために、必要な介護福祉士としての専門的知識・技術を「介護」で学び、それをバックアップする科目として、「人間と社会」「こころとからだのしくみ」の2領域が設定されている¹⁾。さらに介護は実践の技術であることから、学内での学びと実習を通じた実践の統合が必要とされている。

A 短期大学部では初回実習場所として、6日間の認知症対応型生活介護（以下認知症グループホームとする）実習を実施している。認知症グループホームでの体験は、介護福祉士を目指す学生にとって、ケア専門職としての姿勢に影響を与えることから、最も重要であるといえる。

そこで初回実習前のより効果的な教授方法について示唆を得る目的で、介護学生が抱く認知症グループホーム実習前の認知症の人に対するイメージと、実習後のイメージの変化について、無記名記述式にて調査を実施した。さらに実習後のイメージのきっかけとなった関わりの場面・出来事を調査し、関連の分析を試みた。その結果、今後の「認知症の理解と介護」の教授内容に関する示唆を得ることができたと考える。

II. 研究方法

1. 対象

A 短期大学部 1 年次生 20 名。長期履修生（2 年次生）

1 名。計 21 名

男性 8 名 女性 13 名

年齢 10 歳代 14 名、20 歳代 5 名、30 歳代 2 名

2. 調査方法

認知症グループホーム実習後の、認知症の理解と介護の授業の中で質問紙を配布。授業時間内で記載時間を設け自由記述方式にて実施。回答記述後その場で回収した。初回実習を実施した全学生の回答を得た。

3. 調査内容

1) 認知症グループホーム実習前の「認知症の人のイメージ」について。2) 認知症グループホーム「実習後の認知症の人のイメージ」について。3) 「実習後の認知症の人のイメージについて、その様に感じた場面・出来事」の3項目である。

4. 分析方法

自由記述で得られたすべての回答について、質問1～質問3を各項目の文脈ごとに分割し、意味解釈を加え類似性をグルーピングし、カテゴリーを生成した。

質問1「認知症グループホーム実習前の認知症の人のイメージについて」と、質問2「認知症グループホーム実習後のイメージについて」をカテゴリーに分類。質問3「実習後のイメージについて、その様に感じた場面・出来事」の回答から、実習後のイメージについて影響を及ぼした場面・出来事との関連性について考察を加えた。

5. 倫理的配慮

調査実施にあたり、対象者に文章及び口頭にて研究の趣旨・目的を説明した。さらに調査協力に対しては、回収をもって同意を得たとし、結果は個人が特定されないよう処理を行い、成績には影響を及ぼさない事の説明を加えた。

6. 用語の定義

【第1段階実習とは】

介護福祉士養成校では、介護実習 450 時間を含む 1850 時間の学習が義務付けられている。A 短期大学部では、介護実習を段階的に 3 段階に分け、段階ごとに到達目標を設定し教育を行っている。第 1 段階介護実習は 1 年次（長期履修生は 2 年次）後期において実施され、実習目標を①さまざまな介護の対象と介護の需要状況について理解する。②職員と共に介護活動を行い、介護の機能の実際について学ぶ。③施設職員の構成と業務・内容及び介護者の役割について学ぶ。④利用者・家族とのよりよいコミュニケーションの方法を学ぶ。⑤福祉施設の概要を学ぶ。としている。

第 1 段階実習は入学後初めての介護現場体験となる事から、主に利用者とのコミュニケーションを中心に行われている。

【マイナスイメージ、プラスイメージとは】

マイナスイメージを「よくない印象。不利な印象」²⁾から、よくないイメージとした。

プラスイメージはマイナスイメージの対語とし、「有利な事。よい事」³⁾から、よいイメージとした。

【長期履修生とは】

A 短期大学部では、2 年間の履修期間を 3 年または 4 年間で履修可能な長期履修制度を設けている。仕事に従事しながら経済的に無理なく履修し、国家試験受験資格取得を目指す。本研究対象となった長期履修生は、4 年間の履修期間を予定し、現在 2 年目の履修生である。

Ⅲ. 結果

認知症の人に対するイメージについて回答内容をカテゴリー化した結果、質問 1. 実習前の認知症の人のイメージについては、サブカテゴリー 31 から 9 カテゴリーに分類、質問 2. 実習後の認知症の人のイメージについては、サブカテゴリー 50 から 17 カテゴリーに分類、質問 3. 実習後のイメージについて、そのように感じた場面・出来事については、サブカテゴリー 28 から 13 カテゴリー

に分類された。

1. 実習前の認知症の人のイメージについて

認知症の人のイメージとして、「すぐに忘れる」「自分のことができない」「話が通じない」「施設内を常に徘徊している」などといった、31 のサブカテゴリーの 93% がマイナスイメージの回答であった。その他の回答として「攻撃的な人がいたらどうしよう」「BPSD があった時の対応について、もし起きたらと考えた」と言った学生自身が抱く不安に関する内容であった。

認知症グループホーム実習前には、認知症の人が生活

表 1. 実習前の認知症の人のイメージ

カテゴリー	サブカテゴリー
1. すぐ忘れる・理解できない	① すぐ忘れる。
	② 自分の身体の状態がわからない。
	③ 常にボーとしている人が多い。
	④ 自分がなぜこの場にいるのかわからない人がたくさんいる。
2. 話が通じない・同じことを繰り返す	① 話が通じない。
	② 同じことを繰り返す。
	③ 会話がうまくできない。
	④ たくさん話などしなさそう。
	⑤ 同じ質問を頻繁にされるのではないかな。
	⑥ 何を言っても理解してもらえない。
	⑦ 短期記憶の障害によりコミュニケーションがとりづらい。
	⑧ 自分の思いを表現するのが難しい。
3. 勝手に外に出る・徘徊する	① 勝手に外に出る。
	② 多数の人が夕暮れ症候群。
	③ 教科書に書いてある認知症のイメージ。
	④ 帰宅願望がある。
	⑤ 徘徊する人が多数いる。
4. 幻視・物とられ等がある	① 幻視・幻聴等
	② 物とられ妄想などがある。
	③ 大きな声で奇声を発する。
5. 自分で排泄できない	① 排尿・排便が自分でできない。
	② ADL がかなり低下した状態。
6. 怒ってばかりいる	① 怒りっぽい。
	② 怒ってばかりいて少し怖い。
	③ 心配性（症）
7. 役割がない	① 他者との関わりが減る。
	② 役割を失う。
8. 人のものを食べる	① 人のものを食べてしまう。
	② 暴力などをふるう。
9. 学生自身の不安	① 攻撃的な人がいたらどうしよう。
	② BPSD があった時の対応について、もし起きたらと考えた。

する場所として、各種介護施設の特徴についての学習を行い、さらに認知症の症状及び介護について学習を行った後実習に臨んでいる。主な学習内容は、認知症による生活障害に対する事柄であり、認知症の人に対するイメージ形成において、これらの教授内容の影響が大きいと考えられる。

2. 実習後の認知症の人のイメージについて

実習後については、実習前の 31 サブカテゴリーから 50 サブカテゴリーと内容の記載が増えており、さらにその中の 47 (94%) サブカテゴリーが「何度も同じことを繰り返すが話が通じないわけではない」「できることは沢山ある」「徘徊には意味がある」「それぞれ役割を持ち穏やかに生活している」といった、プラスイメージに変化していた。

さらに「言葉一つひとつに意味があるので理解することを学んだ」「認知という言葉が短縮して呼ぶのは差別だと分かった。何気なく周りに流されるように使っていた自分がいた」などといった、認知症の人に対する介護者としての姿勢に対して学ぶ機会となっていた。

一方で「同じことを言ったり、あまり話が通じなかったりと認知症の人らしいと思った。」「何回か実習、ボランティアで施設に行っているのでもそういう経験はあって、話が通じない人や同じことを繰り返す人など、沢山見えてくるので慣れた」といった実習前後のイメージに対し、変化がなかった内容も認められた。

3. 実習後のイメージに変化を与えた場面・出来事について

イメージが変化した実習中での場面・出来事として、「言語障害がありしゃべれない人でも、表情や目の動きで思いを訴えていた」「野菜やくだもの皮むき等、何を切っているのか理解していないが、身体は覚えていることを学んだ」「雪かきや掃除の際に利用者さんも協力していただいた」など、28 のサブカテゴリー中 25 (89%) が、認知症の人が「できること」に注目した内容となった。

一方で実習前と実習後のイメージが変化しなかった事柄として、「同じ話をしたり、話が通じなかったりするとストレスが溜まってしまおうと感じた」「“息子がそろそろむかえにくる”と言っていたので“大丈夫です。迎えるの電話をしておきます”と言ったが、“いや今すぐ帰る”と言われてどうしようと焦ってしまった。」等、BPSD として現れる事柄に対しての対応の難しさを感じていた。

表 2. 実習後の認知症の人のイメージ

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 話が通じない	① 同じことを繰り返したり、あまり話が通じなかったりと認知症の人らしいと思った。
2. しっかりしている・理解している	① しっかりしている人が多かった。
	② なぜこの場にいるのか理解をしている人が多くて驚いた。
3. 話ができる・訴えることができる	① 認知症と言ってもすべての人が話が通じないわけではなかった。
	② 何度も同じことを繰り返すけれど、楽しく話げできた。
	③ 生活で学んだことを話すことができる。
	④ 自分の思いを訴えることができる。
	⑤ 何度か同じ質問をされることはあったが、普通に会話げできた。
	⑥ アルツハイマー病で同じ言動を繰り返す人もいたが、コミュニケーションをとるにあたって難しいイメージはなくなった。又レビー小体型認知症の人などは、比較的記憶も保持されている人が多く、話しをさせていた際にも意思疎通ができてイメージが変わった。
	⑦ 自分の一番良かった(人生の中で)時代について、鮮明に記憶がありしっかりと語れる。
	⑧ 記憶力の低下はあるが、意思疎通は可能である。
	⑨ 会話も認知症の方でもできる人や表情などでコミュニケーションがとれるとわかった。
4. 昔の話が好きな	① 今のことを話すよりも、昔の記憶を引き出しながら話をするのが大切だと思った。
	② 昔の話が好きな。
5. 言葉には意味がある	① 言葉一つ一つに意味があるので理解することを学んだ。
6. 徘徊には理由がある	① 徘徊している人には意味がある。
	② 外に出ると言う行動も自分の家に帰りたいと思う気持ちが出ている。
	③ 夕暮れ症候群のある人はいたが思っていたより落ち着いていた。
7. 対応が難しい	① 常に自分のバックを持っていて帰宅願望があり、施設の出口を聞いてくる人がいて、教科書に載っている認知症の方と同じだと思ってしまった。
	② 実際に短期記憶障害の認知症の人がいたが、5分おきごとに帰りたいなど言っていたため「迎えを呼ぶので安心して下さい」と言っても「私は心配だよ」と言われて想像通りにいかず少し焦った。
8. 楽しい人・優しい人	① 認知症の人はちゃんと自分のものと分かったり、暴力とか振るわない感じだった。本当に実習に行って良かった。
	② 実習前と違うイメージができた。少し怖かったというイメージもなかった。
	③ みなさん面白くて楽しい方が多いと感じた。
	④ 人生の先輩に対して失礼だが、結構ニコニコして可愛いらしい。
	⑤ 明るい人が多かった。
	⑥ 日数を重ねるごとに距離が縮まり優しく接していただけた。
9. 手伝いができる	① 手すりや歩行器を使い、歩行ができ家事の手伝いもして活発なイメージが変わった。
10. 他者に対する気遣いがある	① 周りをよく見ていて、少しの変化に気づく。
	② 個人のこだわりや性格などはあるものの、利用者のつながりも発見でき、お互いに相手のことを思っていることが分り他者の尊重があるイメージになった。
11. 誰かの支援が必要	① 全員が自分のことができないわけではない。しかし全部できる方はいない。
	② 考えははっきりしている時が多いが、誰かの支援がなければ事故・怪我などに繋がる。
12. できることは多くある	① できることは多くある。
	② ほとんど最後までやりきることができる。
	③ グループホームで実習をして認知症の人を見ていたら、声掛けなどをすれば理解してくださる沢山のことができていたので認知症の人に対するイメージが変わった。
	④ 割とびんびんしてグループホームに入らなくても家で生活できそうな人にもいた。
	⑤ 認知症は多少あるが、歩行でも理解度、こだわり、話すこともほとんどの人が可能でしっかりとした意思を持っていた。皆さんちゃんと意思を持っているので、かなり自立・自律していると思った。
13. 特別な人ではない	① 認知症という症状があるけど特別な人ではない。
	② 変なことを言っている人もいるけど、認知症であっても 80 年 90 年生きてきたことに変わりはない。
	③ 軽度の人であれば健常者の方との違いはさほどない。
	④ 外見上は自分達と何も変わらないといった事が大きかった。
	⑤ 利用者のほとんどが穏やかな人だった。
14. 介護者の姿勢が大切	① 短期記憶ができない方が多いので、何分も経たないうちに同じことを何回も言ったり、聞き返してくる。でも、言ったこと全てを忘れるわけではなく、例えばきついことを職員に言われたり、悪い態度で接されたなど私たち(職員)の行動をしっかりと見ていて忘れずしっかり覚えていてくれた人が多くいた。
15. 尊敬の意味を考える	① 「認知」という言葉を短縮して呼ぶのは差別だと分かった。何気なく周りに流されるように使っていた自分がいた。
	① 認知症の方でも一人ひとりが同じ症状ではないこと。
16. 症状には個性がある	② 日内変動が顕著にみられ、その人の以前からの生活習慣によって、不穏になったりする様子がある。
	③ 同じことをくり返して混乱している人を実際見たが次の日は普通。
	④ 日・時間によって言動に大きな差がある。
	⑤ 思っていた以上に物や人がわかっていない人もいて、その症状は日によって異なる。
	⑥ この人絶対、認知症だとすぐにわかると思っていたが、見た目は全然わからなかった。
	⑦ 何回か実習、ボランティアで施設に行っているのでも、そういう経験はあって、話が通じない人や同じことを繰り返す人など沢山見えてくるので慣れた。
17. 同じことを繰り返す	① 何回か実習、ボランティアで施設に行っているのでも、そういう経験はあって、話が通じない人や同じことを繰り返す人など沢山見えてくるので慣れた。

表 3. 実習後のイメージについて感じた場面・出来事

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 犬・置物 と 思っ て い る	① 車いすの他の利用者さんを犬や置物だと思っていて、職員に対してほとんど毎日「そんな所に置いて、通り歩きに邪魔じゃない?」とか「これはうちの犬なの」とか話していた。でも日によって、人相手に話しかけたりしてて違って思えた。
2. 表情・目 で 訴 え る	① 言語障害があり喋れない人でも、表情や目の動きで思いを訴えていた。
3. 周囲との 会 話 を 楽 し む	① 食堂に集まる際に自立していて、受け答えもしっかり答えていた人が多かった。 ② 実習中昔話等している時笑顔で話をしている、娘との話も楽しそうにしていた。
4. 昔の話で 会 話 が で き る	① コミュニケーションをするときに、言った事の意味が伝わらないことがあったが、昔のことや工夫すればしっかりと会話をすることができた。 ② 昔の記憶を引き出しながら話をすると、スラスラ話題がでてくるがあった。 ③ 昔の遊びや歌など喜ばれた。
5. 話が通じ な い	① 同じ話をしてしたり、話が通じなかったりするとストレスが溜まってしまふと感じた。 ② ストレスをためていくと、介護疲れや殺人という方向に向かってしまうのではないかと思った。
6. 徘徊は畑 仕 事 等 の 為	① 徘徊している人は畑の仕事をしている、娘が待っているなどが多かった。 ② 実習の時娘がどこかにかくれていると言われた。
7. 対応でき ず 困 っ た	① 「息子がむかえにくる」と言っていたので話をしたが、「すぐ帰る」と言われ焦った。 ② 帰宅願望の利用者と関わり、興奮状態を落ち着かせるために、部屋で休んでもらうなどの対策を考えて実践してみたが断り、「帰りたい」と落ち着かなかった。「帰ってやることもある」と同時に、お腹がすいたらしく、おやつ時間が近かったのでおやつを食べてから帰ることを促した。それには同意してくれて笑顔も見られた。教科書通りにはいかないことが分かった。
8. 調理・雪 か き を 手 伝 っ て く れ た	① 野菜やくだもの皮むき等、何を切っているのか理解していないが身体は覚えていることを学んだ。 ② 洗濯物を干したり、たんたんだりを頼んだ時に、とてもきれいに最後までたたんで頂けた。さすが、生活をつみ重ねてきた人たちだと思った。 ③ 雪かきや掃除の際に利用者さんも協力していただいた。
9. 自分のも の を 食 べ る ・ 排 泄 で き る	① ちゃんと自分のものを食べる事。 ② トイレも自分でできる事。
10. 入所者 同 士 の 人 間 関 係	① グループホームへの入居時期が重なっている女性3名が、お互いを意識し、連れ立って帰宅願望にかられたりしていた。 ② 認知症を発症していても人にたいして、依存する傾向のある人や、仲間内で支配しようとする人がおり、通常の社会でもみられる人間関係の様子があり、その時の感情の動きなどは通常の社会の人間関係と変わらず同じだという事を理解した。
11. 入所者 に 対 す る 気 遣 い	① 他者の尊重が感じられたのは、ボールを使ったレクでなかなかボールに触れられない利用者に対し、別の利用者がそっとサポートしている場面があった。 ② 食事の際、配膳が間違っていることにすぐ気付いたのが利用者だった。
12. 学生に 対 す る 気 遣 い	① 私の名前(苗字)を見て、「私の友達にもあなたと同じ苗字の人がいるのよ」と、目が合う度言ってくる利用者がいた。 ② 受け入れを感じたのは、排泄の介助をさせていただいている際に「息子みたいで恥ずかしいよ」といっていただけた場面。
13. 入所者自 身 の 工 夫	① 利用者の方の中には、自分の症状をわかっている人もいて、すぐ忘れてしまったためノートを持ち歩き、自分の体温・血圧も書き、私の名前、予定も書くことで忘れない、忘れてしまっても確認することが出来る。 ② さっきまでのバイタルサインを測った事を忘れてしまっても、自分の字で書いたノートを見て安心する。 ③ 認知症で記憶がはっきりしなくてもしっかりした方だと思った。 ④ レクリエーションの引き出しを作っておかなければと思った。

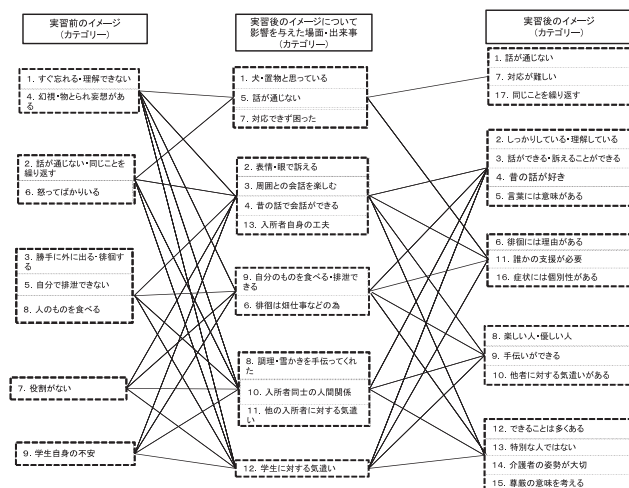


図 1. 実習後のイメージに関連を与えた場面・出来事

プラスイメージに変化した場面・出来事として、言語的コミュニケーションが不十分であったり、記憶障害によって円滑な会話が困難な状況であっても、「表情・目で訴える」「昔の話で会話ができる」等、コミュニケーションを通して得られる影響が大きかったと言える。A短期大学部では、利用者とのコミュニケーションが図れることを第1段階実習の目標の一つとしていることから、これらの体験は認知症の人を理解するうえで効果的であったと思われる。学内での学びと介護現場での学びの重要性が改めて示された結果となった。

認知症の症状及びケアに対する理解としては、「徘徊には理由がある、症状には個別性がある」といった実習後の記述から、BPSDに対する個別支援の重要性を学ぶことができていた。実習前の学習内容として、パーソン・センタード・ケアについて学んでいるが、利用者との関わりを通し、「その人らしさ」の実現に向けて、個別性を重視したケアを行う重要性について理解できた結果となった。

生活支援については「調理・雪かきを手伝ってくれた」「楽しい人・優しい人、他者に対する気遣いがある」等、実際の場面で認知症の人が「できること」に多くの学生が気づくことができていた。さらに緊張している学生に対し、優しい言葉をかけるなど「学生に対する気遣い」を体験したことによって、認知症の人に対するマイナスイメージからプラスのイメージに変化したと思われる。

認知症の人の尊厳について実習前に学習を行っているが、実習後のイメージから「できることは多くある、特別な人ではない、介護者の姿勢が大切、尊厳の意味を考える」といった、尊厳を大切にしたいケアの実践に対し学

Ⅳ. 考察

認知症グループホーム実習前とその後のイメージの変化について、実習後のイメージに影響を与えた場面・出来事との関連を図1に示した。

実習後のイメージに影響を与えたカテゴリーとして、様々なカテゴリーの関連が示されたが、実習前に抱いていたマイナスイメージから、多くがプラスのイメージに変化したことが明らかとなった。

ぶことができている。認知症の人、障害を持つ人のケアを行う専門職として、基本的理念を身に付けることができるよう、実習前の学習内容に関してさらに検討が必要と考える。

一方変化が認められなかった項目では、実習前「すぐ忘れる・理解できない、幻視・物とられ妄想がある」では、実習後も「話を通じない・対応が難しい・同じことを繰り返す」といったイメージとなっていた。これらに影響を与えた場面・出来事として、認知症の進行状況により、言語的コミュニケーションが困難であり、人物誤認等の認知症症状に起因することが要因と考えられる。教科書通りには対応できず、職員・指導者の対応から、個別ケアの必要性和認知症ケアの課題を考える機会となった。認知症の人を介護する介護者の状況を推察し、家族を含めた介護の必要性を学ぶ機会とする事が必要である。

実習前後のイメージに影響を与えた場面・出来事との関連をみると、改めて様々な場면을体験することが重要であると言える。実習前のマイナスイメージによる不安から、実習で体験する多くの機会を逃すことがないように、学生がプラスイメージを抱くことができる学習内容を検討していくことが必要であると考えられる。

V. 終わりに

学内での学習は、記憶障害・見当識障害・理解・判断力の障害といった、認知症の中核症状に焦点を合わせ、それらに関連した生活障害と介護を学ぶ事を重要としていた。その内容の多くが生活障害に焦点をあてていることから、マイナスイメージが形成されたと考える。今後の教授内容として、認知症の特徴について修得することと同時に、認知症の人が「できること」に焦点を合わせ、

学生自身が考え学ぶ機会を提供することが肝要である。

VI. 本研究及び今後の課題

要因分析・カテゴリー化を行う上で、総合的に分析を行ったことにより、回答者の属性による影響に対する分析が不十分であったこと、さらに具体的な内容に関する検討が不十分であったと考える。今後はさらにそれらの要因に関しても検討を行い、研究を継続していきたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた A 短期大学部 1 年次生及び長期履修生の皆様に深く感謝を申し上げます。

【引用文献】

- 1) 特集・座談会新カリキュラムにおける介護福祉士養成教育の方向性. 介護福祉教育. 第 13 巻第 2 号. 2008. 98-113
- 2) 広辞苑第六版. 岩波書店. 2008.
- 3) 2)

【参考文献】

- 1) 横山さつき. 介護実習における学生の不安の軽減に関する一考察. 介護福祉教育. 第 15 巻第 2 号. 2008. 30-43
- 2) 社団法人日本介護福祉士会編. 現場に役立つ介護福祉士実習の手引き. 環境新聞社. 2004